

## はしがき

本書は、ジョウゼフ・コンラッドが人物を描く際にどうしても「個人」の描写という枠をはみ出してしまう点に着目し、彼の中・短編のテキストが、個としての「自己」の向こうに共同体の可能性を見いだすまでの軌跡を辿ったものである。共同体といっても、個の対立概念としての、固い絆でむすばれた均質な集団を必ずしも指すわけではない。拙著『裏切り者の発見から追放へ』でも論じた通り、例えば船乗りの共同体のような集団への忠誠や裏切りという時、個と集団は対立的あるいは二者択一的にとらえられているだろう。ところが、本書第8章で論じているように、個人の心理的葛藤が詳細に描かれていないために従来のコンラッド批評ではほとんど注目されなかった「武人の魂」のような一見時代錯誤的な物語における集団とは、むしろ、個と集団という二項対立そのものに揺さぶりをかけるような奇妙な複数性とでも呼べるものである。コンラッド自身が、晩年の歴史小説『放浪者』(The Rover) (1923)の中で、そのような何とも名づけようのない不思議な複数性のことを、フランス革命の「友愛精神」と対比させて「奇妙な友愛」("strange fraternity")と呼んでいるが、それは、そうとしか呼びようのない「共同性なき共同体」である。「共同性なき共同体」という言い回しからわかるように、コンラッドのテキストが描きとろうとしている共同体は、「私」という西欧の個人的主体の形而上学を解体しようとするデリダ(Jacques Derrida)の「友愛の政治学」や、ジャン＝リュック・ナンシー(Jean-Luc Nancy)といった、いわゆる「大陸系の」思想家の共同体論と非常に親近性が高いように思われる。最近では、そういう観点でコンラッド作品を読み直し、まとめた考えを国際学会で発表し続けているが、それまで日本語で考え、書きためたものは、そこに至る橋渡しになったように思う。それぞれの論文の初出は以下の通りであるが、大幅に加筆・修正を施している。

第1章 「『台風』—MacWhirr船長の性格描写について—」(『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』第7号2002年)

- 第2章 「*The Nigger of the 'Narcissus'*における耳の聞こえない船員」(『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』第13号2008年)
- 第3章 「マーロウの耳—『闇の奥』における聴覚と共同存在」(『コンラッド研究』第1号2009年)
- 第5章 「『秘密の共有者』における記憶の持ち主」(『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』第16号2011年)
- 第6章 「『陰影線』における陸の上の挿話について」(『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』第9号2004年)  
「『陰影線』における超自然」(『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』第11号2006年)
- 第7章 「司令官の中立性」(『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』第10号2005年)
- 第8章 “‘The Warrior’s Soul’ and the Question of Community,’ *The Conradian* 35.1 (Spring 2010) pp.47-61

第4章の「秘密の共有者」論は、2011年7月にポーランドのルブリン(Lublin)で開催された第5回国際ジョウゼフ・コンラッド学会で発表した原稿に加筆・修正を施した論文、“Hospitality in ‘The Secret Sharer’”を日本語に訳したものである。もとの“Hospitality in ‘The Secret Sharer’”の方は、マリー・キュリー・スクウォドフスカ(Maria Curie-Skłodowska)大学のWiesław Krajka教授の編集でコロンビア大学から継続して刊行されている*East European Monographs*の23冊目となる、*Wine in Old and New Bottles: Critical Paradigms for Joseph Conrad*(2014年のはじめに刊行予定)への掲載が決まっている。第8章の「武人の魂」についての論考は、もともと(「—“We existed far apart”—『武人の魂』における共同体」と題して、『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』第12号(2007年12月刊))に発表し、さらに練り直し凝縮したものを、2008年7月に英国リンカーン(Lincoln)で開催された英国ジョウゼフ・コンラッド学会の第34回大会で発表した。この時の口頭発表原稿に加筆・修正を施したものが、2010年

の*The Conradian*掲載論文である。今回本書にまとめるにあたって、当初、2010年の*The Conradian*掲載論文を日本語に訳しているつもりだったが、最終的には、2007年の論文とも2010年の論文とも多少は重なるが別のものに仕上がった。第6章は、2004年の「『陰影線』における陸の上の挿話について」と、2006年の「『陰影線』における超自然」を一つにまとめたものである。

2009年に発足したばかりの日本コンラッド協会が発行した学会誌『コンラッド研究』の記念すべき第1号に掲載された「闇の奥」論を今回本書へ転載することを快諾してくださった日本コンラッド協会の会長石清水由美子先生および運営委員の先生方、また、“Hospitality in ‘The Secret Sharer’”がこうして「生まれ変わった」姿で先に世に出ることを正式に許可してくださったマリー・キュリー・スクウォドフスカ大学のKrajka教授に感謝致します。ここで全員のお名前を挙げるわけにはいきませんが、これまで筆者の学会発表および論文に対して貴重なご意見をくださった国内外の研究者の方々にこの場をかりてお礼を申し上げます。

2012年9月

山本 薫



## 目 次

はしがき .....	1
第 1 章 『台風』 論	
—— マックワー船長の性格描写の揺らぎ —— .....	7
第 2 章 『ナーシサス号の黒人』 論	
—— 耳の間こえない船員ワミボウ —— .....	24
第 3 章 『闇の奥』 論	
—— マーロウの耳と共同存在 —— .....	38
第 4 章 「秘密の共有者」 論	
—— 無条件の歓待について —— .....	54
第 5 章 「秘密の共有者」 補論	
—— 記憶の持ち主について —— .....	76
第 6 章 『陰影線』 論	
—— 告白する「私」の権威 —— .....	92
第 7 章 “The Tale” 論	
—— 司令官の中立性 —— .....	114
第 8 章 「武人の魂」 論	
—— 互いに遠く離れた「我々」 —— .....	129
引用参考文献 .....	149